

Title	次号目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.4 (1964. 4) ,p.346(76)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640401-0076">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640401-0076</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

がその成功を妨げ、挿木された資本主義は順調に成長できなかつた。けれどもアメリカ資本主義は、すでにT郡をしっかりと把握していた。アーノルドが購入する農業機械や彼の生産する農産物が、彼に対して利益をもたらす以上に、いわゆる「独占」の利益に奉仕することが、彼をして農民運動の指導者たらしめたのであった。

(1) 本稿はカーティ教授の研究の忠実な紹介ではない。教授の研究は、フロンティアがアメリカ民主主義を促進したというターナー学説を、T郡を対象として、社会、経済、政治、文化の各面から、計量的方法をも採用して、実証したものである。

### 次号目次

#### 論 説

経済的自由についてのケインズとフリードマンの思想……………千種義人

正義者同盟成立の歴史的意義(その二)……………飯田 鼎

——黎明期におけるドイツ労働運動の国際的性格にかんする考察——

#### 研究ノート

農業生産函数に関する整理……………鳥居泰彦

#### 書 評

ペラン『マンス考』……………渡辺國廣

ミン・シュン・リー

『一六九六年から一六九九年までの貨幣大改鋳』……………飯田裕康

#### 新刊紹介

### 書 評

ヘンリー・ペリング著

『イギリス労働組合運動史』

(Henry Pelling: A History of British Trade Unionism, 1963. London, xi+pp. 287)

飯 田 鼎

イギリス労働運動史にかんする古典的な通史といえは誰しも、シドニー・ウェット夫妻の「労働組合運動史」(History of Trade Unionism, 1920. 山川均・荒畑寒村共訳、板垣書店、上下二巻) G・D・H・コールの「イギリス労働運動史」(A Short History of British Working Class Movement, 1948. 林健太郎他訳、全三冊、岩波現代叢書)をあげるのが躊躇しないであろう。そのほかにも最近では、マルクス主義の立場に立つものとして、たとえば、アレン・ハットの「イギリス労働組合運動史」(British Trade Unionism, A Short History, 1948. 塩田庄兵衛訳、理論社) モートンとテートの共著「イギリス労働運動史」(Morton and Tate: British Labour Movement, 1958) などがあげられる。またわが国においては、山中篤太郎教授の「英国労働運動史」(同文館)がある。それぞれ、特色と個性のあふれた研究であるが、コールとハットおよび山中氏の労作は一九五〇年代にまでふ

書 評

れているのに反し、ウェット夫妻やモートンの研究は一九二〇年代までで終わっているのは惜しまれる。ウェット夫妻は、第二次世界大戦後まで存命だったのに、一九二〇年代の労働運動史をまとめることなくして歿したのはまことに残念というほかはない。モートンとテート(テートはこの著作が現われるまえに急逝)の研究が、やはり一九二〇年代で終わってしまったのは何故なのかその理由は明らかではないが、モートンの手によって、その後の運動史がまとめられるよう期待してやまない。

#### 第一部 労働組合運動の出現

##### 第一章 設定

第二章 その起源——一八二五年まで

第三章 昂まる希望と小さなはじまり——一八二五年から六〇年まで

第四章 圧力団体の形成——一八六〇年から一八八〇年まで

#### 第二部 労働党の強化

##### 第五章 設定

第六章 新組合運動と新しい政治——一八八〇年から一九〇〇年まで

第七章 タッフ・ウェール判決から三角同盟まで——一九〇〇年から一九一四年